

など集て、徒に談柄の料にし、或は古學を立て神ノ方はかしこむ者も、今はの極に至ては、猶漢方こそたのみ處あれ、杯云て、かにかく漢の慕はしく、共に彼の奴となる事を免れず、熟き古義を得る者絶て無りしは、口をしく歎はしきわざなりけり、抑漢の古風も、尙書、周禮、春秋傳、太戴禮、史記、内經等を見るに、藥もあれど、病は多く神に祈り、或は變氣移精此の禁などし、或は針灸灌水などにて、萬病は治て、少は此の古に協て、漫に藥は飲ざりしを、六國より秦の亂にて、漢の高祖の叔孫通に禮を製させしばかり、嚴重き法も絶たる世なりしかば、古醫術杯は廢れりと見えて、同じ史記の中ながら、倉公傳よりは後世めきたる事多し、さる程に仲景の藥方を集て、傷寒論を著はししより、痛く療風の變もて行つ、唐宋元金明など、世の革るまに、各自私に理を論ひ、方を定て、いよ、ます、拙く成たる也、其は術と云物は、凡ならぬ人より、凡ならぬ人にあらざれば傳がたく、書は庸人もよめば行はる、物故、扁鵲、倉公、華陀等の術は亡て、方書のみ多くなりつ、漫に藥のむわざと成たる也、此にても諸術をおきて、假初の病にも、草根木皮を用つ、言痛く論ふは、彼にて、さばかり拙く成にたる療風の、漸々に移來たる也けり、然れども猶今京の初つかたまでは、學問わざこそあれ、我醫道はさばかり漢風ならざりしを、つぎに彼をのみ主と學びもて行つ、今世の如くは成にたり、然えつ、其治術も何も精工成來たらんには、病人も少く、痼疾も愈べき理なるに、中々に代々をへて、古に劣つ、愈益病人の多く、病の愈さる、のみかは、古無りし病さへ出くるは、いと不審しく、怪しき事の極に非や、

〔千重之比登邊〕和方家

三宅意安

寶曆度ノ人、和方ヲ好ム、

延壽和方醫鑑二卷、灸燔鹽土傳一卷

醫鑑ハ中世以降諸家ノ奇方妙方ヲ輯録シ、

鹽土傳ハ俗間ニ所傳ヲ著ス、灸法ヲ載セタリ、

森養竹

元祿ノ度、採用國傳方三卷ヲ著ス、又近世諸家ノ奇方妙方ヲ載タリ、